上野英三郎博士および忠犬ハチ公について

今年の三月八日、ハチ公と上野博士が銅像の形で８０年ぶりに再会したことが大きなニュースとなった。その銅像は東京大学農学部のキャンパス内に設置された。なぜ東京大学農学部に設置されたかというと、上野博士が東京大学（旧東京帝大）の教授であったからである。上野博士は三重県一志郡本村の出身であり、明治 28 年に東京帝国大学農学科卒業し、農業土木、農具の研究をしに大学院へ進んだ。明治 33 年大学院を修了し、それからは東京帝国大学農科大学の講師をすることとなる。明治 35 年には農科大学の助教授になり、明治 44 年には農科大学の教授となり、農業工学を創設した。こうした経歴の中で、実際上野博士がどのようなことをしたのかみていこう。明治 32 年耕地整理法が政府によって制定され、翌年から耕地整理事業が行われた。しかし当時は農業土木学の専門技術者がほぼゼロであり、唯一農業土木を研究していた学者が上野博士であった。そのため上野博士は自身の研究を進めるとともに講演や技術指導を各地で行った。その活動を認められてか、明治 38 年に農商務省委託の農業土木技術員養成官に任命され、20 年にわたって三千人以上の技術者を育成した。また大正 12 年の関東大震災後の帝都復興事業においても上野博士は一役をかった。

さて、上野博士とハチ公との関係性について記述しよう。ハチ公は主人の帰りをいつまでも待つ忠犬として有名だが、その主人が上野博士である。上野博士は大正 13 年秋田犬を購入しハチと名付けた（ハチ公と呼んでいたのは上野博士の弟子である）。しかし、翌年上野博士は脳出血で倒れ亡くなってしまった。しかし忠犬ハチ公は帰らぬ上野博士を 10 年近く渋谷駅で待ち続けた。ハチ公が忠犬として有名になったのは上野博士が亡くなって７年後のことである。ハチ公は帰らぬ主人を待つ忠犬として一時は虐待の対象となったものの、その忠犬ぶりが人々の心をうち、餌を与えられたりするなど可愛がられるようになった。今でも銅像で主人の帰りを待っているハチ公の姿は渋谷のシンボルであり、国内外から一目みようと観光客が押し寄せている。